

第20回国際生化学・分子生物学会議を振り返って

第20回国際生化学・分子生物学会議 会長
本 庶 佐

第20回国際生化学・分子生物学会議の準備（後に組織）委員長をお引き受けしたのは、1998年9月のことであった。当時、IUBMB理事であった安楽先生の発案で日本生化学会と日本分子生物学会の代表からなる準備委員会が開かれ、日本で39年ぶりとなるIUBMB Congressの2006年開催を提案することになった。1999年5月サンフランシスコで開催されたexecutive committeeにおいてIUBMB Congress 2006の日本開催招請演説を行った結果、第20回開催を日本でやるという決定がなされた。学会運営の要めである組織委員の人選にあたっての私の方針は、(1)日本の生化学者と分子生物学者の総意を結集した学会運営を行うこと、(2)幅広い生命科学の研究者が集う学術的に高いレベルの国際学会にすること、(3)多くの若い研究者が国際的な研究者と交流を持ち、若手の国際的発展を促す機会を作ることであった。これを達成できることを主眼として人選を行い、御快諾いただいた組織委員各位は、非常に活発に活動をしていただいた。第1回を2000年4月11日に開催して以来、総計20回もの組織委員会を重ねた。本学会長としての私の唯一最大の貢献はこの組織委員の人選したことである。日時と会場の決定に始まり、テーマの設定、予算の決定、プログラムの大綱、開会式の様式など、一つ一つそれぞれの委員の並々ならぬ努力の結果であった。組織委員各位の御努力について全てを細かく列挙することは不可能である。

しかしながら、学会を行うにあたっては何よりもまず財政的な裏付けがとれるかどうか準備段階として最も頭を痛める場所である。当初、2006 IUBMB Congressは日本生化学会と日本分子生物学会の年会と合同で行い独自年会を2006年には開催しないという両学会からの強いサポートを得たことから、少なく見積もっても6000人の参加者は見込めると考えた。その上で予算を立て、募金活動を開始したのである。この段階で、財務委員長の新井賢一先生が上代淑人先生に募金委員長をお願いされたのは少々驚いた。弟子が恩師にお金集めをお願いするのはどうということかとやや心配したが、上代先生は一向に気にする様子もなく、今学会の財政的支援のために様々なアイデアを出していただいた。結果として適役であり、募金も目標達成率が106%になるという画期的な業績をあげていただいた。途中我々が心配した唯一のことは日本分子生物学会が約束とは違い、2006年末にフォーラムを開催するという決定



をされたことである。しかしながら、結果としてこのような心配は杞憂となり、最終的に9477名（同伴者含む）の参加者を得て、今学会はまれにみる盛会となり財政的にも全く心配がなくなった。

その結果、心置きなく学問的に高いレベルのプログラムを作成することと、できるだけ多くの若い研究者に参加してもらうことに専念することができた。プログラムに関しては、中西重忠プログラム委員長以下のプログラム委員会の先生方の絶大なる努力により、国内外の一流の研究者を集め得ることができた。多くの参加者からとすれば政治的な配慮を優先しがちな国際学会で真に学問レベルを中心にした学会であったというお褒めの言葉をいただき、大変うれしい気持ちでいっぱいであった。唯一の誤算は、組織委員は講演をしないという不文律があることを安楽先生からあとで教えられ、日本を代表する先生方に御自身の学問を紹介していただけなかったことである。

若手の参加を募るために学生登録費は7,000円（事前6,000円）という国際学会にしては破格の金額とした。大会前の2日間、Young Scientists' Programに100名の地域代表を集めた会議（仲野徹委員長）は大変好評であった。IUBMB, FAOBMB, 生化学会などからの援助で若手の旅費など約100名分のfellowshipを支給した。国立京都国際会館の全館と京都宝ヶ池プリンスホテルの会場では、スペースが不足するために独立テントを駐車場に建てポスター会場を倍に広げた。おかげで、学生会員の登録者が3216名となり、このポスターの前で若い学生が時間が

終了しても熱心な討論を続けていたのは誠にうれしい情景として心に刻まれた。

当日の運営が円滑に運んだのは、谷口直之総務委員長 (Secretary General) の並々ならぬご努力によるものであった。とりわけ、皇太子殿下をお招きした開会式とその後の参加者との交流の調整は見事であった。警備がやや過剰となったことはやむを得ないものの、殿下の温かく誠実なお人柄で多くの参加者を心から喜ばせ、また大いに興奮させ、我が国への近親感を高める素晴らしい機会となった。開会式の演出も極めて素晴らしかったという内外からの評価を得た。松田、小坂両大臣ならびに黒川学術会議会長からも流暢な英語でのメッセージをいただき、主催者として誠に面目を施した。

準備開始からの6年間を振り返ってみれば一瞬のようである。しかし、この間、忙しい組織委員各位のスケジュールを調整し、また細かい問題についての検討をしていただいた(株)コングレの小倉徳子顧問、また西村郁子さんには心から感謝している。主催団体の1つである内閣府日本学術会議(荒井国際会議専門職)には、京都府の関係各位とともに皇室との連絡調整に大変なご苦勞をいただいた。学会当日の設営等については、多くの方に一々御礼を申し上げるだけで与えられたページを遙かに超えてしまう。このような大きな事業に関われたことはまさに一生の思い出であり、また、これだけ多くの方と様々な形で知り合えたことも一生の宝であった。

日本生化学会会長挨拶

長田 重一

日本生化学会の80年目の節目の年に、生化学会会長として第20回国際生化学・分子生物学会に参画できたことを大変光栄に思います。71カ国・地域より9000人を超える参加者をえて、盛会のうちに閉会したこと、本庶佑会長、中西重忠プログラム委員長、谷口直之事務局長をはじめとする組織委員会、プログラム委員会、事務局の先生方、スタッフの方々に、お祝いを述べると共に、日本生化学会としてお礼を申し上げます。第79回の日本生化学会・大会を兼ねた本国際会議には日本生化学会からも数多くの若い研究者、学生が参加いたしました。この学会で彼らが数多くのことを学び、また各国の研究者と親密な討論ができたものと確信しております。

1967年、日本生化学会は赤堀四郎先生を会長とし、早石修先生、江上不二夫先生、島藺順雄先生を中心に、東京で第7回国際生化学・分子生物学会を企画いたしました。この国際会議には50カ国から5000人を超える科学者が東

京に集まっています。そして、この会議では、情報の交換ばかりでなく、欧米の研究者と日本の科学者のよい関係が樹立され、その後、数多くの若い学生が欧米に留学する機会が生まれました。私自身、1977年より4年間ヨーロッパで、大変充実した留学生活をおくる機会を頂きました。欧米諸国を始め世界のさまざまな国の科学者と緊密な関係を保つことは日本の科学の発展のために必須であります。このよい関係を維持し、これをさらに発展させることは我々の責務と考えております。

国際会議ではEメールやビデオ会議とは違い、その科学者のサイエンスに対する熱意、情熱をじかに受け取ることができ、かつ、彼らと親密に討論することができます。今回の国際会議が参加された皆様にとって実りある会であったこと、これを機会に皆様の研究、教育活動がますます発展することをお祈りいたします。

日本分子生物学会会長挨拶

花岡 文雄

「第20回国際生化学・分子生物学会議 (IUBMB)」および「第11回アジア・オセアニア生化学者・分子生物学

者連合会議 (FAOBMB)」を日本生化学会と合同、日本細胞生物学会との共催で、古都・京都にて開催できたこと

は、我々の学会にとっても大きな喜びである。

我々の学会は会員数15,000名を越えており、単独で年会を開催したとしても参加者約8,000名、一般演題応募数約4,000題という規模になり、国際会議ということから当然海外からの参加者をかなり見込んでおり、また生化学会・細胞生物学会とも共催なので、果たして国立京都国際会館で開催することが可能なのか、と当初危惧されていた。一方では、英語が共通語の国際会議であるということ、参加費も通常の年会に比べれば高いこと、会期が長いこと、昨年12月の年会から半年しか経っていないので発表する材料が少ないことなどなど、我々の学会からの参加者が少ないのではないかと、という全く逆の見方もあった。結果的には9,000名を超える参加者と約4,700題のポスター発表という予想を上回る、しかし混雑してどうにもならないということはない、活気溢れるちょうどよいサイズの会議になったことはご同慶の至りである。

今回の会議では、ノーベル賞クラスの超大物によるプレナリー・レクチャー、現在の生化学・分子生物学の分野でトップを走っている研究者たちによるシンポジウム、そして一般の研究者たちによるポスター発表と多彩な参加者が国内外から集まった。また若手の研究者も数多く参加し、超一流の研究者の発表に触れたり、あるいは自分のポスター発表に超一流の研究者が訪れて来て質問されたり、大いに触発されることの多い会議であったと思う。同様の国際会議が日本で開催されることはそう多くはないが、年会を少しずつでも国際化し、IUBMBのような会議の良い点を取り入れていく努力が必要ではないかと感じた次第である。

最後に本庶佑会長、中西重忠プログラム委員長、谷口直之事務局長をはじめ、長期間にわたって本会議を準備され、実行された関係者の方々に心よりお礼申し上げますとともに、大盛会であった本会議を共にお祝いしたい。

第20回国際生化学・分子生物学会議 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress

1. 会期：2006年(平成18年)6月18日(日)～23日(金)
(6日間)
2. 会場：国立京都国際会館および京都宝ヶ池プリンスホテル
3. 主催：日本学術会議、社団法人日本生化学会、日本分子生物学会
4. 共催：日本細胞生物学会
5. 後援団体：文部科学省、外務省、厚生労働省、農林水産省、経済産業省、独立行政法人日本学術振興会、JST、NEDO、京都府、京都市
6. 後援学会：日本動物学会、日本植物学会、日本神経化学会、日本神経科学学会、日本解剖学会、日本発生生物学会、日本動脈硬化学会、日本炎症・再生医学会、日本薬学会、日本臨床化学会、日本農芸化学会、財団法人バイオインダストリー協会、日本質量分析学会、日本蛋白質科学会、日本糖質学会、日本生物物理学会、日本脂質生化学会、日本過酸化脂質・フリーラジカル学会、日本ヒトプロテオーム機構、日本薬理学会、日本免疫学会

開会式

平成18年6月18日、第20回国際生化学・分子生物学会議は開会式で幕を開けた。梅雨時にもかかわらず当日は朝から好天に恵まれ、絶好の日和となった。開場は正午であったが、開場直後から続々と参加者の列が途切れることがなかった。警備上の観点から手荷物持込禁止、金属探知機によるチェックなどが実施されたが、大きな混乱なく約

1000名の参加者の京都国際会館メインホールへの入場が行われた。

皇太子殿下は新幹線でご来京され、京都駅から山田啓二京都府知事、榎本頼兼京都市長らを随行して京都国際会館に予定通り到着された。京都国際会館玄関では、本庶佑会長、黒川清日本学術会議会長、長田重一日本生化学会会

長、花岡文雄日本分子生物学会会長、中村順一京都国際会館館長の出迎えを受けられた。

開会式に先立ち司会の谷口直之事務局長により登壇者紹介が行われ、来賓の松田岩夫内閣府特命担当大臣、小坂憲次文部科学大臣、山田啓二京都府知事、榎本頼兼京都市長、主催者側の長田重一日本生化学会会長、花岡文雄日本分子生物学会会長、黒川清日本学術会議会長、メアリー・オズボーン国際生化学・分子生物学連合会長、キュンソ・ハン アジア・オセアニア生化学者・分子生物学者連合会長、G.L. ケニヨン次期国際生化学・分子生物学連合会長、中西重忠第29回日本分子生物学会年会会長、二井將光第11回アジア・オセアニア生化学者・分子生物学者連合会議会長が紹介された。午後3時5分、本庶佑会長の御先導で皇太子殿下がご入場され、谷口事務局長の開会宣言で開会式は幕を開けた。本庶会長の歓迎の辞、黒川日本学術会議会長の主催者挨拶、オズボーン国際生化学・分子生物学連合会長、ハン アジア・オセアニア生化学者・分子生物学者連合会長の母体団体代表挨拶と続き、式典も最高潮となったところで皇太子殿下よりおことばを賜った。殿下は39年前の本会議の東京開催以後、生命科学が大きく発達しゲノム研究が生命の歴史を紐解くことへの興味、また生命科学は日常生活にかかわる課題とも深く結びついて人類の未来に重大な影響を与えると述べられ、参加者は大きな感銘を受けた。その後松田大臣、小坂大臣の祝辞、小泉純一郎内閣総理大臣の祝電披露と続き、最後は中西分子生物学会年会会長による閉会の辞でもって開会式は無事終了した。なお、開会式はすべて英語で行われ、殿下のおことば、両大臣の祝辞も英語であり、参加者はインカムにより同時通訳も聴取できた。

開会式の終了後お茶会出席者は退席したが、引き続きユネスコ世界遺産「京都市」のビデオ上映、午後4時過ぎより能楽「石橋」が演じられ、連獅子の勇壮な舞が開会式の

華やかな雰囲気を盛り上げた。ついで京都シルクホールで6月11日に行われた公開講演会の模様がビデオで紹介された後、ウェルカムレクチャーが実施された。このレクチャーはホンダの2足歩行ロボットであるアシモの実演と講演からなり、演者はホンダアシモの開発者の一人でもある川人光男先生で、座長は津本忠治大阪大学名誉教授にお願いした。川人先生の最先端の発表とアシモの軽妙な動きが調和良く組み合わせられ、大変興味深い講演であった。特にアシモの能楽を模した微妙な動きは秀逸であった。その後メインホールは特別講演へ続いた。

一方、京都国際会館「さくら」では殿下の御臨席を仰いで来賓、須賀侍従など宮内庁随行者、組織委員会委員、主催団体代表、各国代表、特別講演演者、名誉会員などが出席し、午後4時10分よりお茶会が開催された。殿下のご入場後、本庶会長の挨拶によりお茶会は開始された。お茶会は立食形式で、参加者はテーブルを囲んで談笑し、ジュースなどの冷たい飲み物とクッキーなどのお菓子が供された。殿下は自然に談笑の輪の中に入られ、最初のテーブルでは本庶会長ご夫妻、早石修名誉会員ご夫妻、黒川日本学術会議会長、オズボーン国際生化学・分子生物学連合会長、特別講演演者のデーヴィッド・ボールコム博士らと親しくお話を交わされた。その後は本庶会長の御先導で各テーブルを回られ、世界各国からの参加者と交流を深められた。殿下は第一線の研究者の発言に耳を傾けられた後で、熱心に質問もされ、生命科学に対するご造詣の深さに参加者一同は感銘を受けた。このような楽しいひとときは瞬く間に過ぎ、午後5時に殿下は御退席され、お茶会もまもなく終了し、参加者は特別講演に間に合うようにメインホールに移動した。殿下はご休憩の後、ご来館のときと、同じく本庶会長らのお見送りを受けられ、恙無く東京にお戻りになられた。進行役は谷口事務局長が務めた。

(鈴木敬一郎)

Opening Ceremony

Kyoto International Conference Hall

Sunday, June 18, 2006, 15:00–15:50

Introduction of Guests and Organizers

Declaration of Opening

Naoyuki Taniguchi, Master of Ceremony

Secretary General, 20th International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress

Opening Address

Tasuku Honjo

President, 20th International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress, President, 79th Annual Meeting of the Japanese Biochemical Society

Welcome Addresses

Kiyoshi Kurokawa

President, Science Council of Japan

Mary Osborn

President, International Union of Biochemistry and Molecular Biology

Kyung-Soo Hahm

President, Federation of Asian and Oceanian Biochemists and Molecular Biologists Inc.

Address by His Imperial Highness The Crown Prince

Congratulatory Messages

Iwao Matsuda

Minister of State for Science and Technology Policy, Cabinet Office

Kenji Kosaka

Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology

Message from Prime Minister Junichiro Koizumi

(Telegram)

Presented by Naoyuki Taniguchi (MC)

Closing Remarks

Shigetada Nakanishi

Chair, Program Committee

President, 29th Annual Meeting of the Molecular Biology Society of Japan

16:00–16:15

Noh Performance: *Shakkyo* (Stone Bridge)

Red lion: Yasuchika Urata

White lion: Takuji Ueda

Ozutsumi lap drum: Shigeji Ohmura

Kozutsumi shoulder drum: Ichiro Kichisaka

Small taiko drum: Mitsunaga Maekawa

Japanese flute: Ichikazu Sugi

Chorus: Yasumasa Oe

Daisuke Ueda

Koji Hashimoto

Shakkyo—a Noh Play about finding paradise

A priest travels to China to visit Buddhist holy sites. As he is about to cross a stone bridge on his journey, a child appears before him. The child tells him that the opposite bank is the paradise of the deity Monju Bosatsu. The child says that even a famous priest such as he could cross this bridge only after undergoing long and severe religious training. After telling the priest that he will see something wonderful if he waits by the bridge, the child suddenly disappears as a lion emerges and dances among the peony blossoms.

16:30–17:10

Welcome Lecture

A Honda—ASIMO Performance

ASIMO performs the Kyogen play *Selling Kombu*.

Performed by: Honda's ASIMO

Kyogen supervision: Mansai Nomura

Ozutsumi lap drum: Shigeji Ohmura

Kozutsumi shoulder drum: Ichiro Kichisaka

Small taiko drum: Mitsunaga Maekawa

Japanese flute: Ichikazu Sugi

An Original Performance by ASIMO

We set out to develop a robot capable of providing friendship. In December 1996, as the initial step toward this goal, Honda introduced the world's first self-supporting bipedal robot. In October 2000, after implementing a series of improvements, we eventually introduced

A …… Advanced

S …… Step In

I …… Innovative

MO …… Mobility.

This performance shows what we have achieved with ASIMO.

Welcome Lecture

Chairperson: **Tadaharu Tsumoto**

Brain Science Institute/RIKEN, Japan

Understanding Brain by Creating Brain: from system biology of synaptic plasticity to humanoid robots

Mitsuo Kawato

ATR Computational Neuroscience Laboratories, Japan

Address by His Imperial Highness The Crown Prince

Distinguished participants,
Ladies and gentlemen,

I am pleased that the 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and the 11th FAOBMB Congress is being held here, with the participation of so many scientists from all over the world.

39 years ago, in Tokyo, this Congress was convened for the first time in Japan. Since then, the life sciences have made remarkable developments, and we live now in the early 21st century when dramatic advances in the life sciences may herald a new era for mankind. I feel very happy that Japan is again hosting this Congress of worldwide importance, this time in Kyoto, with the theme “Life: Molecular Integration & Biological Diversity.”

It is said that we are now in the midst of the golden age of the life sciences. The human genome, the very blueprint of a human body, has been decoded, and scientists, through their efforts, will eventually translate this genomic information into a scenario for the drama of life. It is extremely interesting how genome research will reveal the history of life.

At the same time, the life sciences are also closely linked to the issues of medical treatment of serious diseases such as leukemia and AIDS and assuring safety of food supply, which are presently confronting us and affecting our daily life. It is no exaggeration to say that this area of science will profoundly influence the future of mankind. In this context, I am very happy to see so many young scientists participating in this Congress. Finally, I wish to express the hope that this Congress will produce fruitful results and contribute to the prosperity and welfare of mankind.

Opening Address

Tasuku Honjo, President of the 20th International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress

Your Imperial Highness the Crown Prince,
distinguished guests, fellow scholars, ladies and gentlemen:

It is my great honor and pleasure to welcome you all to the 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and the 11th FAOBMB Congress. I would like to take this opportunity to acknowledge the efforts of the four organizations whose partnership made this gathering possible: the IUBMB; the FAOBMB; the Japanese Biochemical Society; and the Molecular Biology Society of Japan.

This gathering provides us with an excellent opportunity

to review recent advances in the fields of biochemistry and molecular biology. Moreover, the theme of the Congress—“Life: Molecular Integration & Biological Diversity”—neatly encapsulates the three major challenges now facing the life sciences in the wake of the completion of the human genome sequencing.

First, years of successful effort in the various fields of biology have led to the identification of numerous molecules and their functions. Yet, we still lack a comprehensive view of what life is. We are hampered by the absence of a major integrating principle that would enable us to envision a functional entity from the large amount of molecular data we have gathered. Second, it is now clear that every organism on Earth shares the

basic principle of biology, which is the molecular mechanism for storage, transfer and regulation of genetic information. Nonetheless, we know that organisms exhibit tremendous diversity. Determining how such diverse organisms have evolved and how they have developed their own advantages is not only scientifically interesting but also important in clarifying the ecological issues caused by the life-threatening aspects of industrialization. Third, in spite of the enormous growth of our biological knowledge, we still have not effectively applied our knowledge to the fields of medicine or agriculture. We must seek to cure many diseases by deeper understanding of their molecular mechanisms. Moreover, food security remains a serious issue that will likely worsen in the very near future. We must, therefore, apply our knowledge to solving these global issues.

To achieve this goal, we have invited distinguished international speakers to participate in our 11 plenary lectures and 89 symposia, each of which addresses various aspects of these important issues. As well, we are providing young scientists with opportunities to present their work to a wider audience through poster presentations and discussions of their scientific interests with their colleagues from other countries. Further, during the three days preceding the Congress, we presented a symposium in Kyoto titled the "Young Scientists' Program."

During this Congress, we are also presenting several

innovative projects that have resulted from cooperative efforts between industry and academia. These include several symposium sessions on biotechnology, bioindustry seminars, evening workshops, and a career fair for researchers. I am therefore confident that the Congress will facilitate lively and wide-ranging interactions among scientists from diverse fields, thus leading to a new dawn for the life sciences.

Our host city, Kyoto, an ancient capital of Japan, boasts a history spanning more than 1,200 years. Widely recognized as the cultural soul of Japan, Kyoto is representative of all that is quintessentially Japanese. Notably, UNESCO has designated seventeen locations around Kyoto as World Cultural Heritage sites. At the same time, the city has flourished as the birthplace of many modern high-technology companies. Clearly, Kyoto is an ideal venue for contemplating and debating the future of the life sciences.

To conclude, I would like to express my deepest gratitude to the great many foundations and companies that have provided such generous financial support. Finally, I would like to thank the team from Congress Corporation led by Ms. Tokuko Ogura for their committed secretariat work, without which this congress would not have been possible.

Thank you for joining us.

Welcome Address

Kiyoshi Kurokawa, President of The Science Council of Japan

Your Imperial Highness the Crown Prince, Presidents and Chairs, Distinguished Guests, Fellow Scholars, Ladies and Gentlemen:

On behalf of the Science Council of Japan, a joint-sponsor of this congress, I am extremely pleased to witness the opening of the 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology. I would like to take this opportunity to express our

appreciation to all who helped make this important congress a reality.

Looking back over the history of our field, some of you may remember when the 7th International Congress of Biochemistry was held in Tokyo in 1967. It had been little more than a decade since James Watson and Francis Crick had discovered the DNA double helix, and excitement over this breakthrough was still running

high. At the time, the fields of biochemistry and molecular biology were poised to make great strides. Notably, the analysis of genetic structure, functions, and technology in the 1970s contributed significantly to genetic research on multicellular organisms. Later, a clearer understanding of the gene traits of eukaryotic organisms led to research on many aspects of biological phenomena such as immunity, genesis, cancer, viruses, evolution, and into the mechanisms how a cell operates, functions, interacts and body functions.

It is highly significant that this Congress is being held in Japan for the first time in 39 years, coincident with the deciphering of the human genome and the beginning of post-genome research. We are, therefore, highly confident this gathering of leading researchers in the field from around the world will deliver significant results and offer possibilities to further out understanding of our body and living creatures on Earth.

The remarkable progress of molecular biology has revealed that our life, disease, and various and complicated interactions among molecules in living organisms. The advances have shown, from a scientific perspective, possibilities and potentials on innovative pharmaceuticals, and agriculture, as well as environmental issues such as biodiversity, food and water, energy, and public health. These revelations have brought two essential

scientific issues: ethics and technological innovations and applications.

As a leading supporter of the scientific community, the Science Council of Japan represents all academic disciplines from the humanities and social sciences to the natural sciences, engineering, and health sciences. Our mission is to advance social responsibilities of science community in education, research, society, policy under the important issues at the national, regional, and global platforms. Indeed, SCJ together with other national academies of G8 countries delivered statements to G8 heads of states at the G8 summit last year hosted by UK Prime Minister Tony Blair. And just have delivered another statements last week to the G8 leaders who will gather next month in St. Petersburg hosted by President Putin.

Kyoto, the host city for the event, is an ancient capital and a center of exceptional culture and tradition and this city has even become a global brand as Kyoto protocol for global warming. Clearly, Kyoto is the ideal venue for a gathering of so many great minds from around the world for discussions and the continued development of ideas. I trust you will all enjoy the rich culture and special atmosphere of Kyoto before returning home with new insights and renewed inspiration.

Welcom Address

Mary Osborn, President of the International Union
of Biochemistry and Molecular Biology (IUBMB)

Professor Honjo, Professor Taniguchi, Professor Hahm, Fellow Scientists, Students:

It is both a pleasure and a privilege to welcome you to the 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology/11th FAOBMB Congress. IUBMB is proud to join with the Federation of Asian and Oceanic Biochemists, the Japanese Biochemical Society and the Society for Molecular Biology of Japan to sponsor this outstanding Congress.

Japan has a long tradition in the fields of biochemistry and molecular biology and has played a leading role in IUBMB since its foundation some fifty years ago. In 1967 Japan hosted the 7th IUB Congress in Tokyo so this is the second (IUB)MB Congress to be held in Japan. Two of the endowed plenary lectures at this Congress are named after distinguished Japanese scientists and former Presidents of IUBMB—Osamu Hayaishi and Kunio Yagi.

IUBMB's mission is to foster and support the growth and advancement of biochemistry and molecular biology. IUBMB is a global union with 49 Adhering Bodies and 25 Associate Adhering Bodies representing 74 countries from all five continents. The subscriptions paid by the Adhering Bodies account for 40% of IUBMB's income. FAOBMB, FEBS, PABMB and FASBMB have joined IUBMB as Regional Associated Organizations. IUBMB sponsors IUBMB Congresses, Conferences and Special Meetings as well as the Young Scientist' Program at IUBMB Congresses. In addition it funds Symposia, Interest Group Workshops, Educational Activities, and Plenary Lectures as well as short term Wood Whelan Research Fellowships. In the 2003-2005 triennium IUBMB sponsored 54 Symposia and Interest Groups in 26 different countries including 2 in Japan as well as 25 Educational Activities in all parts of the world. IUBMB Publications produce 45% of IUBMB's income and include Trends in Biochemical Sciences (TiBS), IUBMB Life, BAMBE. The Nomenclature Committee recommends a systematic classification for enzymes based on the reactions they catalyze. To learn more about IUBMB's worldwide activities visit the IUBMB stand at this Congress and look at the IUBMB website (<http://www.iubmb.org>)

IUBMB sponsors a Congress only every third year so for IUBMB they are very special events. This Congress has the title "Life, Molecular Integration and Biological Diversity". It has a wonderful logo that links ancient Zen elements with modern symbols from biochemistry and molecular biology. This is a very appropriate symbol for a meeting held in the ancient city of Kyoto at which exciting science will be presented and discussed by scientists and students from around the world. I hope

that all participants will use the chance provided by the Congress to make new international contacts, to interact with scientists from different part of the world, and to enjoy the history, culture and temples in Kyoto.

An IUBMB Congress is characterized by the very broad spectrum of themes presented in the plenary lectures, the symposia and the poster sessions. The Kyoto Congress fits this pattern with comprehensive coverage of topics in biochemistry and molecular biology involving both basic and clinical research. There are many innovative features at this meeting and I draw your attention in particular to the Bioindustry Seminars, the sessions on Biotechnology, the Career Fair and the Women in Science session. IUBMB is particularly proud of the Young Scientist' Program that has allowed around 100 young scientists from around the world to come together in Kyoto to present their results at the Young Scientist meeting as well as at the main Congress.

I would like to thank the plenary lecturers, the symposia speakers and those presenting posters for their contributions to the Congress, as well as the many companies from Japan and elsewhere that provided financial support for the Congress. And finally thanks to all those who have worked so hard to organize the Congress especially the President, Tasuku Honjo, the General Secretary, Naoyuki Taniguchi, the Treasurer Ken-ichi Arai, the Chair of the Program Committee, Shigetada Nakanishi and the Organizer of the Young Scientists' Program, Toru Nakano. You have put together an excellent program at the forefront of biochemistry and molecular biology that I am sure we are going to enjoy.

Welcome address

Kyung-soo Hahm, President of Federation of Asia and
Oceanian Biochemists and Molecular Biologists Inc.

It is my great pleasure and honor to welcome all of you to this 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Con-

gress on behalf of the Federation of Asian and Oceanian Biochemists and Molecular Biologists Inc. (FAOBMB). FAOBMB is very much proud to sponsor this Congress

together with IUBMB, Science Council of Japan, the Japanese Biochemical Society and the Molecular Biology Society of Japan. I strongly believe that the jointly organized meeting like this one will help greatly to enriching our scientific knowledge benefiting all the participants as well as strengthening our existing and new networks among scientists in the world.

The Federation of Asian and Oceanian Biochemists and Molecular Biologists (FAOBMB) founded in 1972 as an Associate Organization of IUBMB for the purpose of promoting the development of biochemistry and molecular biology in the Asian and Oceanian region. The Federation now has 20 constituent member countries and is playing an important catalytic role in stimulating the association of biochemists and molecular biologists in our region. The relationship between FAOBMB and IUBMB has become closer and closer as is illustrated by the fact that meetings are organized together more actively. We had a successful joint meeting in Bangkok in 2004, and the next congress in Shanghai in 2009 is also

being organized together.

This Congress as you know is also being co-organized and I am very certain that the meeting is going to be very much successful. I would like to express my sincere gratitude to Professor Tasuku Honjo, the president of the organizing committee and all the members of the committee for their efforts in preparing this Congress. I understand that Kyoto is one of the Japan's ancient capitals, with a history of more than 1,200 years and I urge those of you who came from other countries including myself to find some time to enjoy the city and have a taste of Japanese culture. Scientific meetings like this one is of course important to strengthen our scientific knowledge. In addition, I strongly believe that the personal networking among us is also very important in this post-genomic era. I hope all of us can have a great time by an excellent scientific exchange in addition to making many new friends and establishing new personal networks. Thank you very much and enjoy yourselves.

Congratulatory Message

Iwao Matsuda, Minister of State for Science and Technology Policy

Your Imperial Highness, distinguished guests, chairpersons of esteemed organizations, researchers, ladies and gentlemen, I would like to say a few congratulatory words on the occasion of the Opening Ceremony, held here today in the presence of His Imperial Highness the Crown Prince, of the 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and the 11th FAOBMB Congress.

I am told that this is the second time this Congress has been held in Japan, the first being in 1967, when the host city was Tokyo. Over the intervening years, the fields of biochemistry and molecular biology have seen the advent of genetic engineering, eventually leading to a monumental achievement in the form of the mapping of the human genome. The research developments of recent years bring it home to us all that mankind has truly embarked on a new era. I pay sincere tribute to all

those researchers who have devoted their energies, for many years, to the advancement of this discipline.

Biochemistry and molecular biology are the foundation of biology, medicine, pharmacy, agricultural science and the other life sciences. In these disciplines, research on molecular mechanisms and cell functions has shed light on the genesis of life and the mechanism of carcinogenesis, and has led to the development of treatments for adult-onset diseases, to organ regeneration, gene therapy and other towering breakthroughs. Amidst a busy global field, Japan is acknowledged to have made a major contribution to research, notably in intracellular communication, immunity, genome and other areas. The ramifications of these findings have spread beyond the discipline, exerting wide-ranging effects in manufacturing industry, and giving rise to the brand-new biotechnology industry, whose remit includes genetic[MG2]

testing, the development of new medicines, selective breeding of plants and livestock, and a great deal more besides.

I am told that the discussions to be held at this congress will range far and wide over new avenues in post-genome research, including medical treatments based on the genetic data of individuals, regenerative medicine, the comprehensive study of proteins known as proteomics, and the development of new medicines. I hope this congress will help promote progress in these areas, and that this progress, with Japan playing its part, will contribute not only to advances in medicine, but also to solving environmental, agricultural and other problems, thus inching the human race towards a more peaceful existence and a better quality of life.

As it happens, April this year saw the launch of the third 5-year phase of the Japanese government's Science and Technology Basic Plan, in which the life sciences feature strongly. As Japan's Minister of State for Science and Technology Policy, it is my job to translate advances in science and technology into positive influences on our nation's quality of life. In addition to this, I shall be working hard to promote progress in this particular field, which has the potential to bring about great improvements in the quality of life of humanity in general.

Finally, let me express my wishes for the abundant fruitfulness of this congress, and the continued success of everyone involved.

Congratulatory Message

Kenji Kosaka, Minister of Education, Culture, Sports, Science and Technology

Your Imperial Highnesses the Crown Prince,
President of the Organizing Committee,
Fellow scientists,
Distinguished guests,
Ladies and gentlemen:

I would like to extend my congratulations on the opening of the 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and Molecular Biology and 11th FAOBMB Congress here in Kyoto, Japan's representative historical and cultural city, honored as we are by the presence of His Imperial Highnesses, Crown Prince Naruhito.

Biochemistry and molecular biology are central to the life sciences and have been much studied in Japan by researchers specialized in a wide range of disciplines including medicine, biology, agronomy, food chemistry, and pharmacy. Therefore, it is indeed significant that this international congress has convened in Japan for the first time in 39 years. We are tremendously honored with the presence of as many as 8,000 individuals from more than 70 countries today.

Science, technology and academic research are key to the continued development of our lives and economies and will help to open the door to a brighter future for humanity. In its effort to establish Japan as a nation built on scientific and technological innovation, the Japanese Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology is placing special emphasis on the development of life sciences through both education and research, a move intended to support highly creative basic research leading to new medical services and improved health and living standards.

Held under the theme "Life: Molecular Integration & Biological Diversity," this international congress has brought together international researchers specializing in biochemistry and molecular biology to engage in productive discussions on the latest research. I believe the congress will impress the world with Japan's progress in biochemistry and molecular biology and contribute significantly to the development of relevant research, both domestic and international. In light of the fact that this Congress has been co-organized by the Federation of Asian and Oceanian Biochemists and

Molecular Biologists, and that the next congress will be held in Shanghai, I am confident this Congress will lead to bioscientific breakthroughs in Asia and Oceania. In particular, it is my hope that this congress will also contribute to the experience of young researchers and graduate students—who are responsible for the future of the life sciences—by exposing them to global-level cutting edge research in the field, giving them the opportunity to engage in meaningful discussions, and enabling them to interact and establish ties with fellow

researchers.

In conclusion, I would like to express my wishes for the great success of the congress and my hope that participants from abroad enjoy their stay in Japan. I leave you by expressing my sincere appreciation for the commitment of those who have prepared and organized this congress.

Thank you very much.

JB-OUP Poster Prize

現在 Journal of Biochemistry の印刷などを担当している Oxford University Press (OUP) からの提案があり、本大会での優れた Poster の演題に JB-OUP Poster Prize を授与することになった。

組織委員会、プログラム委員会で協議の結果、Journal of Biochemistry への積極的な投稿を呼びかける意味合いもあることから、過去2年間に JB に掲載しているかまたは in press である投稿経験者を対象にしようということになり、JB 編集委員会が中心になり対象者を選考することにした。資格のあった18演題のなかから、鈴木明身常任編集委員長以下、常任編集委員会が厳正な審査を行い、以下の方々が受賞し、大会3日目の展示会場 OUP の Booth で谷口常任編集委員長から各受賞者につき賞金5万円と賞状が授与された。

受賞者および Poster 演題 (申請順) :

- Kazuya I.P.J. Hidari
(1P-A-249) 'Identification and Characterization of

Carbohydrate determinant that is recognized with domain III of dengue virus envelope protein'

- Manish Biyani
(2P-B-188) 'On-chip Evolution: Development of novel bio-reactor microarray chip for geno-pheno linking'
- Ryo Hayashi
(3P-A-072) 'Effect of synthetic peptides derived from formly peptide receptor on superoxide anion production in human neutrophils'

Journal of Biochemistry
www.jb.oxfordjournals.org

受賞者は、OUP ウェブサイトでも発表されています：
JB-OUP Poster Prize
<http://www.oxfordjournals.org/jbchem/posterprize.html>
(OUP)

閉会式

閉会式は6月23日(金)の午後6時から国立京都国際会館 Room A にて行なわれた。本庶佑会長、George L. Kenyon IUBMB 会長、Kyung-Soo Hahm FAOBMB 会長、Mary Osborn IUBMB 前会長、Zhixin Wang 第21回 IUBMB Congress 会長、中野明彦日本細胞生物学会会長、中西重忠プログラム委員長(第79回日本生化学会年会会長)が登壇し、司会は谷口直之事務局長が務めた。最

初に本庶会長から挨拶があり、参加者が9000名の大台を超え会議が大成功であったことが報告され、関係各方面への感謝の意が表された。その後、今会期中に行なわれた IUBMB の理事会から新会長となった Kenyon 博士ならびに FAOBMB 会長の Hahm 博士からスピーチがあり、会議の成功を称えると共に組織委員会への謝辞が述べられた。次いで2009年に上海(中国)で開催される第21回

IUBMB コングレス (第12回 FAOBMB コングレス) の会長である Wang 博士より会議への招聘スピーチと上海紹介のビデオが上映された。IUBMB の2回連続でのアジア開催が納得できるような、発展著しい中国のエネルギーが感じられる紹介であった。最後に、本会議の共催団体である日本細胞生物学会の中野会長より閉会の挨拶があり、3年後の再会を約束して本会議は幕を閉じた。会期のまさ

しく殿であったが、関係役員や各国代表だけでなく早石修先生をはじめ名誉会員や一般参加者も数多く出席し、会場内は和やかな雰囲気であった。閉会式終了後も出席者はその場を去り難く別れを惜しみ、労をねぎらい、談笑し写真を撮りあう姿が数多く見られた。6日間にわたる IUBMB 史上最大規模となった今回の会議も大きな成果を残し、ここに無事終了した。(鈴木敬一郎)

Young Scientists' Program

Young Scientists' Program (YSP) は、世界中の若手研究者の研究奨励のため、IUBMB が力をいれている企画の一つである。IUBMB 本会の前に数日間おこなわれるのが恒例となっている。今回も、IUBMB の直前、6月16日から18日に京都市内のホテル COOP-INN 京都にて98名の参加者を得て開催した。

YSP ならびに IUBMB 期間中の滞在費、学会参加費の全額と、交通費のかなりの部分がサポートされることから、100名の参加枠に対して、文字通り世界中、51カ国と1地域から、270名もの参加希望者があった。希望者を、アジア、東欧、北米+西欧、アフリカ+南米+オセアニア、の四地域に分け、抄録や履歴の評価を、それぞれについて、国内各地にちらばった四名の選考委員の先生方をお願いしておこなった。そのスコアに基づき、参加者の国の経済レベルを多少加味して、最終的には37カ国と1地域から、計100名の参加者を選びだした。

6月16日の夕方、IUBMB の General Secretary である Dr. Jacques-Henry Weil (Institut de Botanique, Strasbourg, France) による Keynote Lecture “Are genetically modified plants useful and safe?” により幕を開けた。その後、簡単な Reception をおこなった。いろいろな国から見ず知らずの若者たちが集まるので、盛り上がりなかつたらという心配もあったが、まったくの杞憂に終わった。終了時間になってもにぎやかな会話は続き、一部の人は、おもしろもおこなわれていたワールドカップサッカーの放映を見るためにスポーツバーへと流れていった。

翌17日が YSP の中核をなす一日であった。朝から、全員がポスター発表をおこない、活発なディスカッションがおこなわれた。分子生物学から生化学、農学、水産学など、非常に多岐にわたる分野における発表があった。最先端の技術を駆使した研究から、お国ぶりのあらわれる地元植物の生物学的活性まで、どれも面白い内容を含んでいた。abstract から、どの発表も相当な水準であろうと予想されたが、その予想にたがわず、どのポスターもすばら

しいできばえであった。日本生化学会から Best Presentation Award と賞金を出していただけることになり、全参加者によりその選考をおこなってもらった。それぞれの参加者に三つの Best Presentation を選んでもらい、その素点を基に、Best Presentation を選出した。Best Presentation Award に輝いた受賞者は、Dr. Ahmad Faried (Gumma University, Japan), Dr. Denis E. Kainov (IGBMC, France), Dr. Hiromichi Kimura (St. Jude Children's Research Hospital, USA), Maarten Leyssen (University of Leuven, Belgium), Dr. Yael Litvak (Hebrew University of Jerusalem, Israel), Dr. Yasushi Ohkubo (Yale University, USA) の6名であった。IUBMB の President である Dr. Mary Osborn から、ポスターセッションの後に開かれた Banquet においてそれぞれの受賞者にお祝いの言葉とともに Award が手渡された。Banquet が前日の reception 以上の盛り上がりを見せたことはいうまでもないだろう。

最終日である18日は、Best Presentation Award の6名による oral presentation がおこなわれた。ポスター発表におとらず、どの受賞者も堂々たる発表で会場を沸かせた。そして、Dr. Knut-Jan Andersen (University of Bergen, Norway) による Closing Lecture “Biospecting—using old methods as a new approach to cancer drugs” により無事閉幕し、バスにて IUBMB の開会式へと向かった。

YSP は、研究の奨励だけでなく、若手研究者の親睦も重視しており、参加者は6月20日の奈良への Excursion にも参加した。東大寺、春日大社と、まったくの異文化に触れ、興奮渦巻くイベントとなった。IUBMB 終了後、多くの参加者からお礼の E-mail が送られてきた。その多くが、financial support や YSP のレベルの高さに感謝していただけて、YSP を通じて、世界中に多くの友人ができたことを喜んでいて、YSP は目的を十分に果たすことができたことを喜びたい。(仲野 徹)

IUBMB との対応など

1997年頃、日本学術会議会員、生化学研究連絡委員会委員長（IUBMB 理事）安楽泰宏らの発議により、第20回 IUBMB 京都総会 2006 の日本への招致活動が始められた。生化学研究連絡委員会は、日本生化学会および日本分子生物学会と協議を重ね、1988年、コペンハーゲンで開催された IUBMB 理事会に我が国への招致を提案した。当時、オーストラリア、ハンガリーなども誘致を希望していたが、我が国への好意的賛同が多かった。その後、日本生化学会と日本分子生物学会は更に検討をすすめ、両学会との合同開催とすること、組織委員長は本庶佑、プログラム委員長は中西重忠、財務委員長は新井賢一、総務委員長は谷口直之が担当することとして、開催準備の検討に入った。さらに FAOBMB との合同会議とすることとした。

1999年5月、米国サンフランシスコで行われた IUBMB の理事会において、本庶委員長は京都での第20回大会の開催の公式提案を行い、満場一致で開催国として決定された。この会議には新井賢一、谷口直之が説明者として出席し、また、当時の生化学研究連絡委員会委員長・安楽も理事として在席した。

2000年7月16日から21日まで英国バーミンガムで開催された第18回大会には、安楽のほか、新井、谷口、

鈴木敬一郎、二井将光らが出席、18日は Hotel Hyatt Regency でジャパンナイトを日本生化学会の主催で開催、大会の宣伝をした。General Assembly では谷口が第20回大会の紹介を行った。次期開催国のカナダナイトもカナダ領事館で行われた。2003年の第19回大会は、カナダのトロントで開催の予定であったが、折からの SARS の患者が発生したため、トロントでの開催は中止となり、急遽モントリオールで第2回の国際ヒトプロテオーム (HUPO) との合同開催として、10月8日から13日まで開催された。本庶、新井、谷口、安楽、コングレから小倉、古賀が出席し、日本生化学会主催のジャパンナイトも大会最終日の11日に Intercontinental Hotel で開催された。

この間、当時の IUBMB 会長 Brian F.C. Clark, secretary general Jacques-Henry Weil が来日、組織委員会と準備状況などを議論した。またオランダアムステルダムで谷口と Jacques-Henry Weil, William J. Lennarz, Vito Turk, Mary Osborn 会長, Du Pont 財務委員長との打ち合わせ、また、ブダペストでも新井、谷口が EC member と会合を開き、準備状況の報告を行った。

(谷口直之)

プログラム編成について

今回プログラム委員会を発足するに当たって日本生化学会、日本分子生物学会の会員の中から21名の委員を依頼し、更に成宮周氏を副委員長とする5名から成るプログラム小委員会と ad hoc な実行委員会を招集し、組織委員会の合意を得て以下の基本方針のもとにプログラムの企画、編成、実施を進めた。

1. 第79回日本生化学会大会及び第29回日本分子生物学会年会も併せて行う今回の第20回国際生化学・分子生物学会議は両学会の共通課題を抽出し、かつそれぞれの特徴を生かした課題の選定を行いプログラムを作成する。また“Life: Molecular Integration and Biological Diversity”という標語に基づき近年発展の著しい分野をとりあげ、一方では日本人が開拓した分野を顕彰する課題もとりあげる。
2. 企画・編成にあたっては本委員会が initiative を取

り、IUBMB, FAOBMB 及び組織委員会が任命した International Advisory Board (IAB) にその企画を提示して助言と了解を得る形で進める。

3. できうる限り多数の国からの招待講演者を選定する。
4. 女性研究者の選定を重視する。
5. 前年度の生化学会大会が10月に、また分子生物学会年会が12月に行われることを考慮し、一般演題の査読の業務を迅速に遂行することによって、出来る限り一般演題の締め切り日を遅くする。また締め切り日を超えた投稿も late breaking abstracts として別個の形で受理する。
6. 32の分野を選定し、各分野に2名の世話人を選び、具体的なシンポジウムのテーマの提出を依頼する。さらに両学会に向けて公募をはかり、また IAB 及び FAOBMB に提案を依頼する。この結果、115のテーマが提案され、当委員会で検討し、84テーマのシン

ポジウムを行うことを決定した。決定されたシンポジウムに関して、日本側の座長1名を決定し、座長の推薦によって外国からの座長1名を決定し、各シンポジウムの演者の選定を依頼、プログラム委員会で最終決定する。会場の数と日程を考えプレナリーレクチャーは11題、シンポジウムは89題以内の中で行う。

7. IUBMBからの生化学、分子生物学の教育シンポジウム開催の強い要請があり、2つのシンポジウムを開催する。また組織委員会から企業との連携を進めるシンポジウムを開催すべきであるとの決定がなされ、3題のシンポジウムを編成する。
8. 9題のプレナリーレクチャーは、組織委員会及びプログラム委員会の委員から演者の推薦を受け、両委員会での検討ののち、IUBMBの助言を仰いだ上で組織委員会で最終決定を行う。
9. FAOBMBの2題のプレナリーレクチャーはFAOBMBに推薦を依頼しプログラム及び組織委員会で最終的な決定を行う。
10. プレナリーレクチャー、シンポジウム及び一般演題(ポスター)は出来る限り一貫性を持った課題の継続となる形での日程をつくる。
11. Young Scientists' Programは独立した委員会のもとで独自の企画、編成を進める。
12. 招待演者の旅費、滞在費の支援額はIUBMBの規約に従う。

経過

以上の基本方針のもとに12回にわたるプログラム委員会あるいはプログラム小委員会を行い、プログラムの企画、編成を進めた。プレナリー演者の候補者は50名近くの推薦があり、推薦された候補者以外の一線の研究者も加えて、分野、国の重複、男女比等を考慮した上で、候補者の研究業績を調査して、約1年半ほど前から交渉に当たり、最終的に11名の演者を決定した。各分野のシンポジウムの世話人には2004年4月にタイトルの提示と座長の候補者の選定を依頼し、数回に渡るプログラム小委員会の検討のもとにカバーすべき内容の変更等を依頼し、最終的に公募の採択分を含め2004年11月に89課題のタイトルのもとにシンポジウムを行うことが決定された。それに基づき各シンポジウムの座長を決定し2005年4月を締切りとして具体的な演者の候補者の提示を依頼した。また4~5名の演者の中で半数以上は外国人であること、また国別に偏りがある時には再検討を依頼した。その結果米州147名、欧州80名、アジア・オセアニア32名、日本147名の演者、また49名の女性研究者を招待した。一般演題の締め切りは2006年2月28日としこの時点において4,763題の提出があった。また4月28日締め切りのlate break-

ing abstractsとして128題の提出があり、最終的に4,649題の一般演題が発表された。このうち外国から提出は546題であった。分野を36にわけ、日本分子生物学会及び日本生化学会から各分野ごとにそれぞれ3、4名の査読者を依頼し、ポスター発表の順序を決定した。更にプログラム委員会の中から影山龍一郎、岡田清隆、堅田利明の3委員に依頼し、1日かけてシンポジウムの分野と対応する形でポスターの発表の日程を決定した。

問題点と反省点

従来の日本生化学会大会及び日本分子生物学会年会と異なり6月に開催の本会への一般演題の応募数の予測が困難であった。このためにプログラム委員長、副委員長が生化学会理事会、分子生物学会評議会に数度出席し、積極的な参加を依頼した。特に分子生物学会では平成16年度の評議会において12月に名古屋で日本分子生物学会2006フォーラムが別個に開催されることが決定されプログラム委員会としては分子生物学会会員の参加を強く危惧した。従って17年度分子生物学会年会で会員に参加を強く喚起するとともに広報委員会を立ち上げ、本学会の広報に努めた。この結果予想を越える8千名強の日本人の参加者があり、ポスター会場が非常に混雑し、会場が暑く、また十分な議論の時間が得られなかったというクレームがあり、この点は大いに反省すべき問題であった。また日程の都合上アブストラクト(CD-ROM)を事前に送ることができず会員に不便をかけた。

第二に一線の日本の研究者は多くの国際学会に招待され、本学会に対してどれだけ興味を持って参加するかが危惧されるところがあった。この点、外国で行われる焦点を絞ったシンポジウムとは異なりプログラム委員会は各分野でテーマを広くカバーすることを要望したが、内容の一貫性を重んじて、焦点を絞ったシンポジウムの提案もなされ頻回にわたる座長との交渉によって改善を求めた。一方プログラムの企画、編成に当たっては両学会の歴代会長を始め多くの学会員の労をいとわない協力を得ることが出来き、ここに深く感謝したい。

第三に近年日本で多くの国際シンポジウムが開催され、かつ招待者への支援額はIUBMBが決定している支援額より多く、事実シンポジウム座長の一部からこの点のクレームがあった。最終的には座長の個人的な努力によって解決されたが、この点も多いに感謝したい。

最後に委員長としての個人的な感慨を述べさせていただく。前回の日本での国際生化学会(1967年)は私が生化学を始めた年であり、幸いにも教室からの支援を受けて学会に参加した。語学の問題と未経験さから学会発表に関しては何も覚えていないが、LipmanやKornbergの顔を見て「自分も将来国際学会に招待されるような研究者になり

たい。」と大きな刺激を受けた。今回の学会が初めての国際学会である若い研究者も多くいることと思うが、その人

達に少しでも研究に対する刺激を与えることができたのなら大きな喜びとするところである。(中西重忠)

Plenary Lectures

Sun. June 18

IUBMB/FAOBMB Hayaishi Lecture

Main Hall/17:00-17:50 (Tentative)

Charles S. Zuker (USA)

Tentative Title: The molecular biology of taste

カリフォルニア大学 San Diego 校のズッカー (Zuker) 博士は、視覚、味覚、圧受容の感覚器の受容機構と細胞内シグナルに関して多くの画期的な研究成果を挙げている。なかでも味覚の受容に関して、甘味、苦味、うま味の受容に関わる一連の G タンパク共役受容体の実体を明らかにし、それぞれの味覚が一連の受容体によってどのように識別されるかの分子機構を明らかにした。Zuker 博士は AAAS 及び全米科学アカデミーの会員として味覚の情報伝達と識別の研究を精力的に進めている。

IUBMB Slater Lecture

Main Hall/18:00-18:50 (Tentative)

Pascale Cossart (France)

Host-pathogen interactions: the *Listeria* paradigm

パスツール研究所のコサット (Cossart) 博士は、ヒト病原菌リステリアの病原性と宿主の反応機構の研究を進め、小腸或は胎盤の関門通過機構、病原菌と細胞の接着機構、病原遺伝子の細胞内作用機序などを次々と明らかにし、病原菌の細胞内進入や病原遺伝子の発現に関して、数多くの新しいメカニズムを示す画期的な成果をおさめ、種々の国際賞を受賞している。

Mon. June 19

IUBMB Lecture

Main Hall/8:30-9:20

Gerald Hart (USA)

A nutrient/stress sensor globally regulating signaling, transcription, and protein turnover

ジェラルド・ハート (Gerald Hart) 博士は、核・細胞質にある蛋白質の O-GlcNAc による糖修飾を発見し、長年にわたってその分野をリードしている。O-GlcNAc によって修飾される蛋白質は、転写因子、核膜孔、情報伝達

因子、細胞骨格など多岐にわたっており、細胞内のメジャーな翻訳後修飾である。近年、この O-GlcNAc 修飾の役割として、転写因子やプロテアソームの機能調節に関与していることが明らかとなり、その重要性はますます注目されている。国際複合糖質機構賞 (IGO Award) を受賞している。

IUBMB Ochoa Lecture

Main Hall/13:30-14:20

David C. Baulcombe (UK)

Tentative Title: Gene silencing in plants

デーヴィット・ボールコム (David C. Baulcombe) 教授は、植物のウイルス抵抗性獲得の分子機構として、低分子 RNA によるウイルス遺伝子の発現抑制が重要であることを見出し、siRNA や miRNA の産生および遺伝子抑制の作用機序について研究を進めてきた。現在の分子生物学の焦点の一つであるエピジェネティクス研究の国際的リーダーである。

Tue. June 20

FAOBMB Murachi Lecture

Main Hall/8:30-9:20

Zhu Chen (China)

Systems biology and leukemia: A track towards the cure

ズー・チェン (Zhu Chen) 博士 (1989 年、パリ第七大学で博士号取得) は、中国科学アカデミー副会長、米国科学アカデミー外国会員、フランス科学アカデミー外国会員、InterAcademy Panel 共同議長等の要職を務めている。氏は著名な白血病研究者であり、ヒト癌に対する分子標的治療、特に、all-trans レチノイン酸処置等による急性前骨髄細胞性白血病の分子治療法の研究で高い評価を得ている。現在は、中国のヒトゲノムプロジェクトの責任者として活発な研究を展開している。

Wed. June 21

IUBMB Beatty Lecture

Main Hall/8:30-9:20

Tak W. Mak (Canada)

Tentative Title: Genetic dissection of cell death pathways

タック・マック (Tak Mak) 博士 (カナダ, トロント大学の教授, プリンセス・マーガレット病院のがん研究所長) は, T-cell 受容体 cDNA を最初に単離したグループとして知られている。その後, Mak 博士はノックアウトマウスを用いて, 発生, 免疫, 細胞死におけるシグナル伝達経路を明らかにしている。博士はこれまでペーリング賞, ガードナー賞, General Motor Sloan 賞, エーリッヒ賞など数々の国際賞を受賞している。アメリカ科学アカデミー外国人会員。

FAOBMB Lecture

Main Hall/13 : 30-14 : 20

Yoshinori Ohsumi (Japan)

Cellular recycling system—molecular dissection of autophagy

大隅良典博士は, 東京大学教養学部基礎科学科, 同理学系大学院を卒業後, 米国ロックフェラー大に留学, 東京大学・理学部, 教養学部を経て, 平成8年から現職 (基礎生物学研究所教授)。一貫して酵母を材料とした細胞生物学を進める。この18年は, 細胞内の主要なタンパク質分解経路であるオートファジーの分子レベルでの解析を世界に先駆けて展開している。

Thu. June 22

FEBS Lecture

Main Hall/8 : 30-9 : 20

Iain Mattaj (Germany)

The Ran GTPase as a spatial regulator in mitosis

イアン・マタイ (Iain Mattaj) 博士は, ヨーロッパ分子生物学研究所総長を務め, RNA 研究の世界的権威である。最近, RNA ならびに蛋白質の核-細胞質間輸送機構に関する研究を端緒として, 低分子量 GTPase Ran に関する研究, 細胞分裂期における核膜ならびに核膜孔アセンブリ機構の解析へと幅広い研究を展開している。また, 博士は, FEBS 記念賞, Louis-Jeantet 医学賞などの多くの賞を受賞し, Cell, RNA, EMBO Journal といった数々の国際雑誌の editorial board を務めている。

Nishizuka Lecture

Main Hall/13 : 30-14 : 20

Hans Clevers (The Netherlands)

Wnt and Notch cooperate to maintain proliferative compartments in crypts and intestinal neoplasia

小腸は組織特異的幹細胞から固有の機能的細胞に分化しているが, クレバーズ (Clevers) 博士は, Wnt, Delta/Notch, Hedgehog のシグナル伝達経路が協調しながらこれらの分化を制御することをマウスの遺伝学的解析により明らかにされた。また, 腸管の陰窩と絨毛の形成が ephrin/Eph B を介する細胞運動により決定されることも明らかにされた。このように, Clevers 博士は腸管上皮発生の研究において多大な貢献をしている。

Fri. June 23

FAOBMB/IUBMB Yagi Lecture

Main Hall/8 : 30-9 : 20

Bruce Stillman (USA)

The initiation of chromosome DNA replication in eukaryotes and its relationship to chromosome segregation

ブルース・スティルマン (Bruce Stillman) 博士は, オーストラリア出身で, Australian National University 医学部で PhD を取得したのち, ポストドクとして Cold Spring Harbor Laboratory に移り, 以来同研究所で研究を行っている。1994年に James Watson 博士の後を継いで同研究所の所長, 2003年には President に就任し現在にいたる。Stillman 博士はこれまで一貫して真核細胞の DNA 複製の研究を行ってきた。その研究成果は, ウイルス SV40 DNA 複製反応の試験管内再構成, 酵母およびヒト染色体複製の分子機構の解明に多大な貢献をした。その業績により The Royal Society のメンバー, U.S. National Academy of Sciences のメンバーに選出されるとともに, Sloan Prize (2004) などこれまで数多くの賞を受賞している。

FAOBMB Svasti Lecture

Main Hall/13 : 30-14 : 20

Sunghoon Kim (Korea)

Tentative Title: Functional network of aminoacyl-tRNA synthetases and human diseases

ソウル大学教授キム (Kim) 博士は, 各種のアミノアシル tRNA 合成酵素の研究を詳細に進め, tRNA の結合残基の同定, 伸長因子との相互作用部位の証明, 阻害抗生物質の発見等の成果を得ている。同時に蛋白質合成機構を越えた本酵素の生理的役割について研究を進めている。すなわち, リジル tRNA 合成酵素と HIV ウイルス Gag との相互作用を見出し, また, 本酵素と複合体を作る蛋白 p38, p43, p18 について研究を進め, p43 が分泌されサイトカイン活性を持つことを示している。これらの研究業績によって Kim 博士は韓国生化学会賞, Seoul City Award, Presidential Award 賞等を受賞している。

その他

組織委員会名簿

会長兼組織委員長 本庶 佑 京都大学大学院医学研究科・教授

組織委員会

事務局長 谷口 直之 大阪大学大学院医学系研究科・教授

委員 中西 重忠 大阪バイオサイエンス研究所・所長

新井 賢一 東京大学名誉教授・先端科学技術研究センター・特任教授

柳田 充弘 京都大学大学院生命科学研究所・教授

二井 將光 財団法人微生物化学研究会微生物科学研究センター・特別研究員

(第11回アジア・オセアニア生化学者・分子生物学者連合会議組織委員長)

杉野 明雄 大阪大学大学院生命機能研究科・教授

上代 淑人 東京大学名誉教授, 京都大学・特任教授

鈴木敬一郎 兵庫医科大学・教授

安樂 泰宏 東京大学・名誉教授

顧問

総務委員会

委員長 谷口 直之 大阪大学大学院医学系研究科・教授

副委員長 鈴木敬一郎 兵庫医科大学・教授

委員 米田 悦啓 大阪大学大学院生命機能研究科・教授

古川 貴久 大阪バイオサイエンス研究所・研究部長

岩井 一宏 大阪市立大学大学院医学研究科・教授

サブコミッティ

広報委員会 古川 貴久 大阪バイオサイエンス研究所・研究部長

黒崎 知博 理化学研究所・グループディレクター
免疫・アレルギー科学総合研究センター

会場委員会

石川 冬木 京都大学生命科学研究科・教授

上村 匡 京都大学生命科学研究科・教授

大野 睦人 京都大学ウイルス研究所・教授

岡田 雅人 大阪大学微生物病研究所・教授

垣塚 彰 京都大学生命科学研究科・教授

影山龍一郎 京都大学ウイルス研究所・教授

狩野 方伸 大阪大学医学系研究科・教授

木村 宏 京都大学医学研究科・科学技術振興教授

河野 憲二 奈良先端科学技術大学院大学・教授

斎藤 尚亮 神戸大学バイオシグナル研究センター・教授

佐邊 壽孝 大阪バイオサイエンス研究所・部長

清水 章 京都大学大学院医学研究科・教授

瀬原 淳子 京都大学再生医科学研究科・教授

高尾 敏文 大阪大学蛋白質研究所付属プロテオミクス総合研究センター・教授

滝澤 温彦 大阪大学理学研究科・教授

田代 啓 京都府立医科大学・教授

土井 健史 大阪大学薬学研究科・教授

戸田 達史 大阪大学医学系研究科・教授

中山 和久 京都大学薬学研究科・教授

原島 俊 大阪大学工学研究科・教授

松田 道行 大阪大学微生物病研究所・教授

松本 智裕 京都大学放射線生物研究

登録推進委員会

	センター・教授	緒方 正人	三重大学大学院医学系研究科・教授
八木 健	大阪大学生命機能研究科・教授	岡野 栄之	慶應義塾大学医学部・教授
吉森 保	国立遺伝学研究所・教授	小椋 利彦	東北大学加齢医学研究所・教授
米原 伸	京都大学生命科学研究科・教授	押村 光雄	鳥取大学大学院医学系研究科・教授
饗場 弘二	名古屋大学大学院理学研究科・教授	小原 雄治	情報・システム研究機構 国立遺伝学研究所生物遺伝資源情報総合センター・教授
秋山 徹	東京大学分子細胞生物学研究所・教授	貝淵 弘三	名古屋大学大学院医学系研究科・教授
五十嵐和彦	東北大学大学院医学系研究科・教授	影山龍一郎	京都大学ウイルス研究所・教授
池田 義孝	佐賀大学医学部分子生命科学・教授	和中 明生	奈良県立医科大学・教授
石井 俊輔	理研・筑波研究所・分子遺伝・主任研究員	片岡 徹	神戸大学大学院医学系研究科・教授
石川 冬木	京都大学大学院生命科学研究科・教授	勝木 元也	自然科学研究機構基礎生物学研究所・所長
石野 良純	九州大学農学部・教授	桂 勲	国立遺伝学研究所構造遺伝学研究センター・教授
石原 健	九州大学大学院 理学研究院・教授	門松 健治	名古屋大学大学院医学系研究科・教授
石森浩一郎	北海道大学大学院理学研究科・教授	寒川 賢治	国立循環器病センター研究所・生化学部長
一瀬 宏	東京工業大学大学院生命理工学研究科・教授	神田 大輔	九州大学生体防御医学研究所・教授
伊藤 誠二	関西医科大学医化学・教授	菊地 和也	大阪大学大学院工学研究科・教授
岩井 一宏	大阪市立大学大学院医学研究科・教授	菊池 章	広島大学医学部・教授
上村 匡	京都大学大学院生命科学研究科・教授	北川 雅敏	浜松医科大学医学部・教授
内海 俊彦	山口大学農学部・教授	北島 健	名古屋大学生命農学研究科・生物機能開発利用研究センター・教授
大久保岩男	滋賀医科大学・教授	木戸 博	徳島大学分子酵素学研究センター・教授
大隅 典子	東北大学大学院医学系研究科創生応用医学研究センター・教授	黒木 由夫	札幌医科大学・教授
大隅 良典	基礎生物学研究所分子細胞生物学研究部門・教授	郷 通子	お茶の水女子大学・学長
太田 邦史	理化学研究所中央研究所・ユニットリーダー	後藤由季子	東京大学分子細胞生物学研究所・教授
太田 敏子	筑波大学大学院・教授	小林 和人	福島県立医科大学・教授
大野 茂男	横浜市立大学大学院医学研究科・教授	小林 達彦	筑波大学応用生物化学系・教授
小笠原直毅	奈良先端科学技術大学院大学・教授	近藤 滋	名古屋大学大学院理学研
緒方 一博	横浜市立大学大学院医学研究科・教授		

- | | | | |
|-------|---|-------|--------------------------------------|
| | 究科・教授 | | 学研究所・教授 |
| 近藤 宇史 | 長崎大学医学部附属原爆
後障害医療研究施設・教
授 | 田中 啓二 | 東京都臨床医学総合研究
所・副所長 |
| 斎藤 春雄 | 東京大学医科学研究所・
教授 | 谷口 維紹 | 東京大学大学院医学系研
究科・教授 |
| 坂口 和靖 | 北海道大学大学院理学研
究科・教授 | 田村 眞理 | 東北大学加齢医学研究
所・教授 |
| 板部 洋之 | 昭和大学薬学部・教授 | 田矢 洋一 | 国立がんセンター研究
所・部長 |
| 佐谷 秀行 | 熊本大学医学部・教授 | 多羽田哲也 | 東京大学分子細胞生物学
研究所・教授 |
| 篠原 彰 | 大阪大学蛋白質研究所・
教授 | 辻 明彦 | 徳島大学工学部・教授 |
| 島本 功 | 奈良先端科学技術大学院
大学・教授 | 辻本 賀英 | 大阪大学医学系研究科・
教授 |
| 菅澤 薫 | 理化学研究所中央研究
所・ユニットリーダー | 土田 成紀 | 弘前大学医学部・教授 |
| 菅野 純夫 | 東京大学大学院新領域創
成科学研究科・教授 | 中井 彰 | 山口大学大学院医学研究
科・教授 |
| 杉山 俊博 | 秋田大学医学部・教授 | 中島 茂 | 岐阜大学大学院医学系研
究科・教授 |
| 鈴木 健二 | 立命館大学理工学部・教
授 | 永田 和宏 | 京都大学再生医科学研究
所・教授 |
| 鈴木 宏治 | 三重大学大学院医学系研
究科・教授 | 永田 恭介 | 筑波大学大学院人間総合
科学研究科・教授 |
| 鈴木 裕 | 旭川医科大学生化学・教
授 | 中野 明彦 | 東京大学大学院理学系研
究科・理化学研究所中央
研究所・教授 |
| 関口 清俊 | 大阪大学蛋白質研究所・
教授 | 中村 和行 | 山口大学医学部・教授 |
| 田賀 哲也 | 熊本大学発生医学研究セ
ンター・教授 | 中村 俊一 | 神戸大学大学院医学系研
究科・教授 |
| 高井 義美 | 大阪大学大学院医学系研
究科・教授 | 中山 敬一 | 九州大学生体防御医学研
究所・教授 |
| 高木 淳一 | 大阪大学蛋白質研究所 | 鍋島 陽一 | 京都大学大学院医学研究
科・教授 |
| 高橋 考太 | 久留米大学分子生命科学
研究所・教授 | 西 美幸 | 京都大学大学院薬学研究
科 |
| 高橋 智 | 筑波大学基礎医学系・教
授 | 錦見 盛光 | 和歌山県立医科大学・教
授 |
| 竹市 雅俊 | 理化学研究所発生再生科
学総合研究センター高次
構造形成研究グループ・
グループディレクター | 仁科 博史 | 東京医科歯科大学難治疾
患研究所・教授 |
| 竹川 薫 | 香川大学農学部生命機能
科学科・教授 | 西村 泰行 | 和歌山県立医科大学・教
授 |
| 竹下 治男 | 島根大学医学部・教授 | 西山 真 | 東京大学生物生産工学研
究センター・教授 |
| 竹島 浩 | 京都大学大学院薬学研究
科・教授 | 野島 博 | 大阪大学微生物病研究
所・教授 |
| 田代 啓 | 京都府立医科大学・教授 | 長谷 俊治 | 大阪大学蛋白質研究所・
教授 |
| 田代 聡 | 広島大学原爆放射線医科 | | |

畠山 鎮次	北海道大学大学院医学研究科・教授	宮園 浩平	東京大学大学院医学系研究科・教授
畠山 智充	長崎大学工学部応用化学科・教授	村上 康文	東京理科大学基礎工学部・教授
花岡 文雄	大阪大学大学院生命機能研究科・教授	森 寿	富山大学大学院医学研究科・教授
畠山 昌則	北海道大学遺伝子病制御研究所・教授	森 泰生	京都大学大学院工学研究科・教授
林 秀行	大阪医科大学・教授	山崎 伸二	大阪府立大学農学生命科学研究科・教授
林崎 良英	理化学研究所ゲノム科学総合研究センター・プロジェクトディレクター	山中 伸弥	京都大学再生医科学研究所・教授
原 英二	徳島大学ゲノム機能研究センター・教授	山梨 裕司	東京医科歯科大学難治疾患研究所・教授
東山 繁樹	愛媛大学医学部・教授	山村 研一	熊本大学発生医学研究センター・教授
久下 理	九州大学大学院理学研究院・教授	山本 博	金沢大学大学院医学系研究科・教授
藤井 順逸	山形大学大学院医学研究科・教授	山本 雅之	筑波大学先端学際領域研究センター基礎医学系・教授
藤木 幸夫	九州大学大学院理学研究院・教授	山本 雅	東京大学医科学研究所・教授
古川 鋼一	名古屋大学大学院医学系研究科・教授	養王田正文	東京農工大学大学院工学研究科・教授
別所 康全	奈良先端科学技術大学院大学・教授	横田 義史	福井大学医学部・教授
堀井 明	東北大学大学院医学系研究科・教授	吉田 裕樹	佐賀大学医学部分子生命科学・教授
堀池喜八郎	滋賀医科大学・教授	吉本 谷博	金沢大学大学院医学系研究科・教授
本家 孝一	高知大学医学部・教授	渡邊 嘉典	東京大学分子細胞生物学研究所・教授
本庶 佑	京都大学大学院医学研究科・教授		
本間 道夫	名古屋大学大学院理学研究科・教授	プログラム委員会	
眞貝 洋一	京都大学ウイルス研究所・教授	委員長	中西 重忠
益谷美都子	国立がんセンター研究所・室長	副委員長	成宮 周
松永 司	金沢大学大学院自然科学研究科・教授	委員	岡田 清孝
松本 邦弘	名古屋大学理学研究科・教授		影山龍一郎
三浦 直行	浜松医科大学・教授		堅田 利明
三浦 正幸	東京大学大学院・教授		北 潔
水野 猛	名古屋大学大学院生命農学研究科・教授		北 徹
南 康博	神戸大学大学院医学系研究科・医学部・教授		

近藤 寿人	大阪大学大学院生命機能研究科・教授	和泉 孝志	群馬大学大学院医学系研究科・教授
榊 佳之	理化学研究所ゲノム科学総合研究センター・センター長	一條 秀憲	東京大学大学院薬学系研究科・教授
笹井 芳樹	理化学研究所発生・再生科学総合研究センター・グループディレクター	伊藤 誠二	関西医科大学・教授
杉野 明雄	大阪大学大学院生命機能研究科・教授	伊藤 隆司	東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授
高井 義美	大阪大学大学院医学系研究科・教授	伊藤 文昭	摂南大学薬学部衛生薬学科・教授
谷口 維紹	東京大学大学院医学系研究科・教授	稲垣 冬彦	北海道大学大学院薬学研究科・教授
谷澤 克行	大阪大学産業科学研究研究所・教授	井上 國世	京都大学大学院農学研究科・教授
西田 栄介	京都大学大学院生命科学系研究科・教授	巖倉 正寛	産業技術総合研究所・部門長
花岡 文雄	大阪大学大学院生命機能研究科・教授	岩崎 秀雄	早稲田大学理工学部・助教授
松本 邦弘	名古屋大学大学院理学研究科・教授	岩坪 威	東京大学大学院薬学系研究科薬学部・教授
宮園 浩平	東京大学大学院医学系研究科・教授	上村 匡	京都大学大学院生命科学系研究科・教授
村松 喬	愛知学院大学心身科学部健康科学科・教授 名古屋大学・名誉教授	内田 和彦	筑波大学大学院人間総合科学研究科・助教授
森川 耿右	技術研究組合 生物分子工学研究所・教授	梅田 真郷	京都大学化学研究所・教授
山本 正幸	東京大学大学院理学系研究科・教授	遠藤 玉夫	東京都高齢者研究福祉振興財団東京都老人総合研究所・研究部長
査読委員会	饗場 弘二	遠藤 斗志也	名古屋大学大学院理学系研究科・教授
	秋山 徹	大熊 芳明	富山医科薬科大学薬学部・教授
	荒木 令江	大隅 良典	自然科学研究機構基礎生物学研究所・教授
	荒木 弘之	大隅 典子	東北大学大学院医学系研究科創生応用医学研究センター・教授
	有田 正規	小椋 光	熊本大学発生医学研究所・教授
	飯野 雄一	貝淵 弘三	名古屋大学大学院医学系研究科・教授
	石浦 章一	柿本 辰男	大阪大学大学院理学研究科・助教授
	石川 冬木	影山龍一郎	京都大学ウイルス研究所・教授
		加藤 茂明	東京大学分子細胞生物学

	研究所・教授		科・教授
門脇 孝	東京大学大学院医学系研究科・教授	多羽田哲也	東京大学分子細胞生物学研究所・教授
鎌滝 哲也	北海道大学大学院薬学研究科・教授	田矢 洋一	国立がんセンター研究所・部長
北川 雅敏	浜松医科大学医学部・教授	辻本 賀英	大阪大学大学院医学系研究科・教授
神田 大輔	九州大学生体防御医学研究所附属感染防御研究センター・教授	土井 健史	大阪大学大学院薬学研究科・教授
小堤 保則	京都大学大学院生命科学研究所・教授	永田 恭介	筑波大学基礎医学系・教授
後藤由季子	東京大学分子細胞生物学研究所・教授	中山 敬一	九州大学生体防御医学研究所・教授
近藤 滋	名古屋大学大学院理学研究科・教授	成松 久	産業技術総合研究所糖鎖工学研究センター・副センター長
近藤 寿人	大阪大学大学院生命機能研究科・教授	仁科 博史	東京医科歯科大学難治疾患研究所・教授
佐藤隆一郎	東京大学大学院農学生命科学研究科・教授	西村いくこ	京都大学大学院理学研究科・教授
佐藤 文彦	京都大学大学院生命科学研究所・教授	根岸 学	京都大学大学院生命科学研究所・教授
塩見 春彦	徳島大学ゲノム機能研究センター・教授	長谷部光泰	自然科学研究機構基礎生物学研究所・教授
篠原 彰	大阪大学蛋白質研究所・教授	濱田 博司	大阪大学大学院生命機能研究科・教授
島本 功	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科・教授	久堀 徹	東京工業大学資源化学研究所・助教授
白川 昌宏	京都大学大学院工学研究科・教授	平林 義雄	理化学研究所脳科学総合研究センター・ユニットリーダー
末松 誠	慶應義塾大学医学部医化学・教授	深見希代子	東京薬科大学生命科学部・教授
杉田 護	名古屋大学遺伝子実験施設・教授	古川 鋼一	名古屋大学医学部・教授
鈴木 明身	理化学研究所フロンティア研究システム・グループディレクター	前田 正知	大阪大学大学院薬学研究科・教授
鈴木 利治	北海道大学大学院薬学研究科神経科学分野・教授	真木 寿治	奈良先端科学技術大学院大学バイオサイエンス研究科・教授
関水 和久	東京大学大学院薬学系研究科薬学部・教授	牧野 圭祐	京都大学国際融合創造センター・センター長・教授
田賀 哲也	熊本大学発生医学研究センター・教授	正井 久雄	財団法人東京都医学研究機構東京臨床医学総合研究所・プロジェクトリーダー
高橋 考太	久留米大学分子生命科学研究所・教授	正木 春彦	東京大学大学院農学生命
滝澤 温彦	大阪大学大学院理学研究		

- 科学研究科・教授
- 松田 道行 大阪大学微生物病研究所・教授
- 松本 邦弘 名古屋大学大学院理学研究科・教授
- 御子柴克彦 東京大学医科学研究所脳神経発生分化分野・教授
- 水島 昇 財団法人東京都医学研究機構東京都臨床医学総合研究所・プロジェクトリーダー
- 蓑島 伸生 浜松医科大学光量子医学研究センター・教授
- 宮田 敏行 国立循環器病センター研究所・部長
- 村上 章 京都工芸繊維大学高分子学科・教授
- 柳川 弘志 慶應義塾大学大学院理工学研究科・教授
- 山口 直人 千葉大学大学院薬学研究院・教授
- 山田 陽城 北里大学北里生命科学研究所・教授
- Domestic Liaison Committee (主催学会対応)
- 委員長 杉野 明雄 大阪大学大学院生命機能研究科・教授
- 委員 大石 道夫 財団法人かずさディー・エヌ・エー研究所・所長
- 川崎 敏祐 立命館大学糖鎖工学研究センター・センター長
- 竹縄 忠臣 東京大学医科学研究所・教授
- 西本 毅治 九州大学大学院医学研究院・教授
- 御子柴克彦 東京大学医科学研究所・教授
- 村松 喬 愛知学院大学心身科学部健康科学科・教授
名古屋大学・名誉教授
- 山本 正幸 東京大学大学院理学系研究科・教授
- ヤングサイエンティストプログラム委員会
- 委員長 仲野 徹 大阪大学大学院医学系研究科・教授
- 副委員長 石田 靖雅 奈良先端科学技術大学院大学・助教授
- ヤングサイエンティストプログラム査読委員
- Knut-Jan Andersen University of Bergen・教授
- Jacques-Henry Weil Institute de Botanique・教授
- 谷澤 克行 大阪大学産業科学研究科・教授
- 上村 匡 京都大学大学院生命科学研究所・教授
- 大矢 禎一 東京大学大学院新領域創成科学研究科・教授
- 小椋 利彦 東北大学加齢医学研究所・教授
- 菊地 章 広島大学大学院医歯薬学総合研究科・教授
- 工藤 明 東京工業大学大学院生命理工学研究科・教授
- 後藤由季子 東京大学分子細胞生物学研究所・教授
- 近藤 滋 名古屋大学大学院理科学研究科・教授
- 佐谷 秀行 熊本大学大学院医学薬学研究部・教授
- 末松 誠 慶應義塾大学医学部・教授
- 住本 英樹 九州大学生体防御医学研究所・教授
- 関口 清俊 大阪大学蛋白質研究所・教授
- 瀬原 淳子 京都大学再生医科学研究科・教授
- 田代 啓 京都府立医科大学分子医学・教授
- 萩原 正敏 東京医科歯科大学難治疾患研究所・教授
- 水野 健作 東北大学大学院生命科学研究所・教授
- 南 康博 神戸大学大学院医学系研究科・教授
- バイオテクノロジー・セッション委員会
- 新井 賢一 東京大学・名誉教授, 先端科学技術研究センター・特任教授
- 永山 治 中外製薬株式会社・代表取締役
- Stephen Dahms University of Southern California・教授

	Brian F.C. Clark University of Aarhus・教授	公開講演会担当	生田 宏一 京都大学ウイルス研究所・教授
財務委員会 委員長	新井 賢一 東京大学・名誉教授, 先端科学技術研究センター・特任教授	募金委員会名簿 委員長	上代 淑人 東京大学・名誉教授, 京都大学・特任教授
副委員長	上代 淑人 東京大学・名誉教授, 京都大学・特任教授	副委員長	大石 道夫 財団法人かずさディー・エヌ・エー研究所・所長
顧問	大石 道夫 財団法人かずさディー・エヌ・エー研究所・所長		別府 輝彦 東京大学・名誉教授, (財)バイオインダストリー協会・会長
	永山 治 中外製薬株式会社・代表取締役	顧問	永山 治 中外製薬株式会社・代表取締役
	野口 照久 ゲノム創薬フォーラム代表, テノックス研究所・所長		野口 照久 ゲノム創薬フォーラム代表, テノックス研究所・所長
委員	別府 輝彦 東京大学・名誉教授, 財団法人バイオインダストリー協会・会長	委員	岩瀬 壽 ゲノムベイ東京協議会・代表理事
	岩瀬 壽 ゲノムベイ東京協議会・代表理事		佐々木浩二 株式会社アドイン研究所・代表取締役
	佐々木浩二 株式会社アドイン研究所・代表取締役		清水 孝雄 東京大学大学院医学系研究科・教授
	清水 孝雄 東京大学大学院医学系研究科・教授		数納 幸子 株式会社医学生物学研究所・会長
	数納 幸子 株式会社医学生物学研究所・会長		高木 智史 バイオ・アクセラレーター株式会社・代表取締役
	高木 智史 バイオ・アクセラレーター株式会社・代表取締役		武田 俊一 京都大学大学院医学研究科・教授
	田中 啓二 東京都臨床医学総合研究所・副所長		館 糾 株式会社カネカ・顧問
	辻本 豪三 京都大学大学院薬学研究科・教授		辻本 豪三 京都大学大学院薬学研究科・教授
	中村 義一 東京大学医科学研究所・教授		難波 啓一 大阪大学大学院生命機能研究科・教授
	難波 啓一 大阪大学大学院生命機能研究科・教授		藤吉 好則 京都大学大学院理学研究科・教授
	藤吉 好則 京都大学大学院理学研究科・教授		古市 泰宏 株式会社ジーンケア研究所・代表取締役
	古市 泰宏 株式会社ジーンケア研究所・代表取締役		細川 信義 エンゼル証券株式会社・代表取締役会長
	細川 信義 エンゼル証券株式会社・代表取締役会長		正井 久雄 東京都臨床医学総合研究所・研究室長
	正井 久雄 東京都臨床医学総合研究所・研究室長		森川 耿右 技術研究組合 生物分子工学研究所・教授
	森川 耿右 技術研究組合 生物分子工学研究所・教授		柳田 敏雄 大阪大学大学院生命機能研究科・教授
	柳田 敏雄 大阪大学大学院生命機能研究科・教授		(2006年6月現在)

寄付者一覧

- 旭化成ファーマ株式会社
 あすか製薬株式会社
 アステラス製薬株式会社
 アストラゼネカ株式会社
 株式会社アドイン研究所
 アフィメトリクス・ジャパン株式会社
 アプライド バイオシステムズジャパン株式会社
 アベンティス ファーマ株式会社
 アムジェン株式会社
 アルフレッサ ファーマ株式会社
 株式会社医学生物学研究所
 株式会社池田理化
 岩井化学薬品株式会社
 栄研化学株式会社
 エーザイ株式会社
 エスエス製薬株式会社
 エルメッドエーザイ株式会社
 株式会社大熊
 大阪薬研株式会社
 大塚製薬株式会社
 株式会社大塚製薬工場
 株式会社オキシジェニクス
 小野薬品工業株式会社
 オムロン株式会社
 化研生薬株式会社
 科研製薬株式会社
 株式会社カネカ
 カネボウ株式会社
 キッセイ薬品工業株式会社
 杏林製薬株式会社
 協和醸酵工業株式会社
 キリンビール株式会社医薬カンパニー
 グラクソ・スミスクライン株式会社
 群馬家田化学株式会社
 興和株式会社
 財団法人蛋白質研究奨励会
 財団法人阪大微生物病研究会
 佐藤製薬株式会社
 沢井製薬株式会社
 三共株式会社
 株式会社三笑堂
 参天製薬株式会社
 株式会社三和化学研究所
 株式会社ジーンケア研究所
 シェリング・プラウ株式会社
- 塩野義製薬株式会社
 株式会社柴尾商店
 株式会社島津製作所
 株式会社新興精機
 住友ベークライト株式会社
 生化学工業株式会社
 仙台和光純薬株式会社
 ソフトバンク・インベストメント株式会社
 第一製薬株式会社
 大正製薬株式会社
 第27回日本分子生物学会年会
 大日本住友製薬株式会社
 大鵬薬品工業株式会社
 宝化成機器株式会社
 タカラバイオ株式会社
 武田薬品工業株式会社
 田辺製薬株式会社
 三和理研株式会社
 中外製薬株式会社
 株式会社ツナミネネットワークパートナーズ
 椿本興業株式会社
 株式会社ツムラ
 株式会社デ・ウエスタン・セラピテクス研究所
 帝人ファーマ株式会社
 株式会社テクノ・スズタ
 テルモ株式会社
 東和薬品株式会社
 トーアエイヨー株式会社
 凸版印刷株式会社
 株式会社トミー精工
 富山化学工業株式会社
 鳥居薬品株式会社
 中山商事株式会社 筑波営業所
 ナカライテスク株式会社
 日京テクノス株式会社
 日研化学株式会社
 日新器械株式会社
 日東電工株式会社
 ニプロファーマ株式会社
 日本化薬株式会社
 日本ケミファ株式会社
 日本シェーリング株式会社
 日本新薬株式会社
 日本製薬株式会社
 日本臓器製薬株式会社

日本たばこ産業株式会社
 日本電子株式会社
 日本バイオ・ラッド ラボラトリーズ株式会社
 日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社
 ノバルティス ファーマ株式会社
 バイエル薬品株式会社
 株式会社バイオロジカ
 はじめ科学株式会社
 万有製薬株式会社
 ファイザー製薬株式会社
 扶桑薬品工業株式会社
 フナコシ株式会社
 ブリストル・マイヤーズ株式会社
 株式会社ビー・エム・エル
 株式会社堀場製作所
 丸石製薬株式会社
 マルホ株式会社
 三笠製薬株式会社
 株式会社三菱化学生命科学研究所
 三菱ウェルファーマ株式会社
 株式会社ミノファージェン製薬
 武蔵エンジニアリング株式会社
 株式会社ムトウ
 明治製菓株式会社
 明治乳業株式会社
 メルク・ホエイ株式会社
 持田製薬株式会社
 森永乳業株式会社
 株式会社薬研社
 株式会社ヤクルト本社
 株式会社山下設計
 雪印乳業株式会社
 リードエグジビション ジャパン株式会社
 理科研株式会社
 ロート製薬株式会社
 ワイス株式会社
 わかもと製薬株式会社
 株式会社和科盛商会東京支社
 和研薬株式会社
 旭 正
 次田 皓
 鍋島 陽一
 藤田 道也
 松田 源治
 山野 俊雄

 日本製薬団体連合会

スポンサーシップ

ダイヤモンド・スポンサー

アプライドバイオシステムズ株式会社

ゴールド・スポンサー

アステラス製薬株式会社
 GE ヘルスケア バイオサイエンス株式会社
 タカラバイオ株式会社
 武田薬品工業株式会社
 中外製薬株式会社
 SBI ホールディングス株式会社
 株式会社島津製作所

シルバースポンサー

エーザイ株式会社

プラチナ・スポンサー

アフィメトリクス・ジャパン株式会社
 第一製薬株式会社
 協和発酵工業株式会社
 小野薬品工業株式会社
 株式会社トミー精工
 (株)デ・ウエスタン・セラピテクス研究所
 (株)堀場製作所
 持田製薬株式会社
 株式会社オキシジェニクス
 凸版印刷株式会社

ブロンズ・スポンサー

株式会社 TSUNAMI ネットワークパートナーズ

フレンズ・スポンサー

日本バイオ・ラッド ラボラトリーズ株式会社
 リード エグジビション ジャパン株式会社
 日本ベーリンガーインゲルハイム株式会社
 日本 IBM

その他の補助金・助成金

京都市
 日本自転車振興会
 独立行政法人日本万国博覧会記念機構
 財団法人稲盛財団
 財団法人花王芸術・科学財団
 加藤記念バイオサイエンス研究振興財団
 上原記念生命科学財団
 財団法人内藤記念科学振興財団